

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

2020年の『福祉のひろば』

今年もありがとうございました。来年も、よろしく願いいたします。

- 1月号 地域からみた2020年——地域づくりはつながりの積み重ね
- 2月号 社会福祉法人からみた2020年——権利を守る民主的運営をめざして
- 3月号 地域福祉の最前線！ 民生委員活動で住民をつなぐ
- 4月号 やっぱり福祉が好きだから
たいへんでも、やりがいをもって、楽しくはたらきたい！
- 5月号 だれのための保育・教育？！ “10の姿”と道徳の教科化を考える
- 6月号 新型コロナウイルス 暮らしを支える福祉・医療現場への影響
- 7月号 日本で介護をまなぶベトナムの若者たち
- 8月号 戦時下とコロナ禍はなぜ似ているのか——メディアのあり方から考える
- 9月号 なぜいま、ソーシャルワークを問い直すのか
- 10月号 維新政治は社会福祉になにをもたらしたのか
- 11月号 ここは天国 釜ヶ崎 生きるを耕してきた“文化”
- 12月号 “国民感情”はどこからくるのか
——生活保護裁判・名古屋地裁判決から考える



「なにわの台所」を おそったコロナ

大阪市の中心部、ミナミにある「黒門市場」。全長約580メートルのアーケード下には鮮魚店など約170店舗が並ぶまさに「なにわの台所」だ。コロナ以前は中国・韓国などからの外国人観光客でいっぱいの市場だったが、いまその姿は皆無である。自粛期間中の客足は約九割減で、約半数の商店や飲食店が休業や廃業に追い込まれ、シャッターを下ろしたままのところも目につく。

創業 96 年 の匠…高橋

黒門の
ワンコイン市
22.23.24.10時
11Aは毎週土曜日



創業96年のお豆腐屋さん。2代目のときに黒門に来て、約80年が経つという。キタ、ミナミ、天王寺の料亭やお食事処、ホテルの和食店に得意先が多く、注文を受けて配達している。古くからのお客さんを大切にしたいから、価格はいっさい上げないでがんばっているが、その得意先が新型コロナで休業したことなどもあって、4月の売上は昨年の5分の1。ようやく少しだけ戻りつつあるという。外国人客には生ものは売っていないが、濃度1.8倍の豆乳が評判で、お客さんがSNSで宣伝してくれることもあり、東アジアから訪ねてくれる人もあると笑顔で答えてくれた。



おろし

卸と小売りのふぐ屋さん。卸先のお店のほとんどが休業したので売上はピタリと止まり、いまもほとんど戻っていないという。そんななか、7月から土曜日を中心に定期的に開催している「黒門ワンコイン市」。マスコミにもとりあげられ、イベント中はひさしぶりににぎやかさがもどったが、イベントが終わるとピタッと止まってしまう。得意先も給付金などでなんとかつないでいるけれども、この先、いつまでもつのか心配、と話してくれた。



黒門市場から日本橋商店街を通って、通天閣まで足を延ばした。途中、休業中のホテルの多さが目についた。通天閣までまっすぐ約200メートル続く「通天閣本通商店街」。入り口にある喫茶店は、1975年から営業をつづけている。夫婦で仲良く経営している店の客層は、外国人観光客は少なくほとんどが昔からの常連さん。自粛のときは、近所のお店はほとんどが閉めたけれども、「行くところがなくなるから開けといてよ」と常連さんに言われて閉めなかった。しかし、4~5月の売上は半減してしまった、と話してくれた。

昨年10月の消費税増税の影響を受けた商人のまぢを、コロナ禍が追い打ちをかけた。話をしてくれた店主たちは「長年やっているが、こんなことは初めて」と声をそろえる。「休業要請と補償は一体に」という叫びに対して、国や自治体の対策は後手後手にまわり、しかも不十分な中身だ。黒門市場では「むかしからの商売仲間がやめてしまってさみしい」という声もたくさん聞いた。大阪経済のあり方がインバウンドに偏重してしまうと、庶民のまぢは衰退してしまう。そんななかで必死に踏みとどまっている「なにわのど根性」を見た。

(写真・文 塩見一弥)

●特集● “国民感情”はどこからくるのか——
生活保護裁判・名古屋地裁判決から考える

憲法と生活保護法の趣旨を無視した引き下げは許されない
和田 信也 10

1人ひとりが実感をもって「生活保護は権利」と主張できるために
大口耕吉郎 14

現場で感じる分断と攻撃の負のスパイラル 宮地 絵美 18

【討論】つくられた“国民感情”に惑わされないために 21

財源はある。国民のしあわせになりたい思いを政治へ 唐鎌 直義 25

●サブ特集● コロナ禍・コロナ以後の教育研修のあり方を考える

【座談会】 司会：鴻上圭太 28
遠藤佳代子／豊浦晶子／林陽二郎／中尾朱里・齋藤佳代子

●トピックス●

【PHOTO】 コロナ禍でも、工夫してがんばってます☆ 36
障害者生活施設での新型コロナウイルス集団感染を経験して【後篇】
園部 泰由 40

地域生活を支えることと感染予防のはざままで 服部 裕美 44

日本学術会議会員候補の総理大臣による任命拒否についての声明 48

●連載●

WORK WORK——わくワク——

一口食べたら思わず「うふふ」♡ NPO法人さざんか 52

検証！ 介護保険20年

第3回 認知症ケアにみる介護保険 杉原久仁子・鈴木森夫 54

かさねあい、はぐくみあう保育実践

子どもの「できた！」をいちばん近くでよこせる 大塚亜侑実 58

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（17） 水野阿修羅 62

相談室の窓から

ふんばりつづける現場に感謝と敬意を 青木 道忠 64

育つ風景 保護者とともにすすむと決意した保育園 清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

大阪ろうあ会館事務局長として（7） 清田 廣 68

映画案内 『風待ち』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 72

貧困と野宿を描きあげたクヌート・ハムスンの『飢え』

似らずとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

顔のないところに顔があってもいいじゃないか！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



ろう役者が活躍できる世界をめざして

全日本ろうあ連盟創立70周年記念映画『咲^えむ』主演女優 藤田菜々子

私が女優を志したのは、障がい者に対する世間のイメージを変えたかったからです。「女優になりたい」と口にしたのは小学六年生のころ。ちょうど『ラブレター』や『オレンジデイズ』といった、ろう者を主人公にしたドラマが多く観られた時期です。

私はこうした作品を観て、ろう役者はいないのか？ ろう者は主人公でなければいけないのか？ と疑問に感じました。どちらの作品も、耳の聞こえるプロの役者さんが演じています。また、当事者の私から見るとろう者は日常に溶け込んで暮らしているように思えるのですが、作品に登場する際にはほぼ必ず主人公になってしまいうことに、強い違和感を覚えたのです。決してドラマを批判したかったわけではなく、「ろう役者をキャストイングする」「ろう者が脇役として世界観の一部を担った作品を創る」といった選択肢があってもいいのにな、といった心境でした。こうした疑問を胸に劇団ひまわりに入団し、レッスンを受けながらNHKドラマ『中学生日記』に出演したり、劇団主催のミュージカル風舞台に参加したりと、女優への道を歩みました。

そこでわかったことは、「ろう役者が活躍できない理由は現場にある」という事実です。たとえば、発声練習や歌のレッスンなど、劇団のレッスン内容が、身体や表情よりもどちらかという声の抑揚のほうがやや重視されているように感じました。いざ舞台に出演できても、場面転換は音楽を聴かないとわからず、むずかしいことも多かったです。

劇団で成功するには、劇団が開催するミュージカルや舞台でキャストイングされる必要があります。競争のはげしい演劇界で社会に認められるレベルの役者になるためには、ろう者であることがハードルになるといっ学びがありました。

もうひとつ大きな要因は、制作側や視聴者の心理です。脚本家や監督は、視聴者のニーズも合わせて作品をつくっていくので、世間が観たいと思う内容に仕上がります。『中学生日記』では、脚本家が私に質問し、聞こえる立場から見て印象に残ったエピソード



ふじたななこ

1996年生まれ、24歳。静岡県浜松市出身。文章を書くことを好み、大学では脚本について学ぶ。元劇団ひまわり研修生、全日本ろうあ連盟創立70周年記念映画『咲む』主演女優。

出演作品/映画『ゆずり葉』、NHKドラマ『中学生日記』、映画『咲む』

を抜粋した作品を描いてくださいました。視聴者からは、脚本の内容が心に響いたという声が多かったです。観客が求めている作品のイメージに合わせて、かつ、制作側がくりたい作品をつくりたいと思うと、ろう者は主人公になったほうがおもしろいのです。

これらのことはネガティブなことではありません。劇団のスタッフも『中学生日記』の制作陣も、私の存在をころよく受け入れていただき、ろう役者をぜひ世の中に増やしていきたいと力いっぱいがんばってくださいました。実際に、彼らのおかげで私はドラマに出演できたり、舞台に立てたりと貴重な経験ができたので、本当に感謝しています。

そんななかで、やっぱり作品は観客がいないと成り立たないという事実は大きいです。つまり、観客のニーズに合わせた結果、ろう役者が起用されなかったり、主人公以外の役割がなかなかつくれなかったりすることが起こりうるというわけです。ろう役者が活躍していく世界をつくるためには、世間のイメージから変える必要があります。

私が今回、映画『咲む』への出演を決めたのは、早瀬監督の「人とかかわりを通して社会を変えていく未来を描きたい」という言葉に惹かれたためです。世界中のさまざまな境遇にある子どもたちが希望をもてるような作品をつくりたいという熱い想いをうかがい、私もその作品にかかわりたいと思いました。

今回の映画を通して伝えたいことは、「自分がやりたいこと、やれることを示しながら誠実に行動することを重ねれば、社会(世間)が見る障がい者像も変わるかもしれない」というメッセージです。私自身、まだまだいたらない点も多いですが、この作品にかかわれたことは大きな一歩になったように感じています。貴重な機会をいただけたことに感謝をしながら、メッセージをお伝えできたらと思っております。

ぜひ、どこかのトークショー(または舞台挨拶、講演会)でお会いしましょう！

国民感情はどこから来るのか

生活保護裁判・名古屋地裁判決から考える

厚生労働省が二〇一三年から実施した生活保護費の大幅な引き下げの撤回を求めて、全国で一〇〇〇人を超える生活保護利用者が国などを訴えている集団訴訟で、全国の先駆けとなる判決公判が、六月二五日に名古屋地裁でありました。名古屋地裁の裁判長は、生活保護基準の引き下げは厚生労働大臣の「裁量権の範囲内」であるとして、原告の訴えをすべて棄却しました。

名古屋地裁の判決は、生活保護基準の引き下げは与党である自民党の公約であり、選挙で自民党が与党となっているということは、つまり生活保護基準の引き下げは国民感情にもとづくものであり、違法性はないと判断をくだしています。「与党が言っているのだから正しい」というのは、憲法と法律に則って判断する裁判所の役割を、放棄していると言わざるを得ません。

生活保護基準は、生活保護制度以外のさまざまな社会保障制度の基準、ひいてはさまざまな賃金の基準にもなっています。生活保護基準の引き下げは、利用者だけでなく、国民生活全体に影響をあたえるということです。

くわえて、今回の名古屋地裁の判決からは、日本社会において権力を監視する力が弱まりつつげていること、民主主義の根幹がどんどん崩されようとしていることを、顕著にあらわしていると思えます。

今回の判決にかぎらず、日本学術会議会員候補を総理大臣が任命しなかった問題や、本誌一〇月号でフリーライターの松本創さんが指摘されたジャーナリズムの弱体化もそうです。大きな権力を握っている人が、その権力を乱用していないか。国家として、国民の基本的な人権を守る政治をしているか。裁判所をはじめ、議員やさまざまな分野の研究者・専門家、ジャーナリストは、根拠となる憲法、法律、調査、事実等にもとづき、権力を監視する役割を担っているはずです。しかし、その役割がどんどん弱まっていると言わざるをえません。

ジャーナリストの岩瀬達哉さんは、著書『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』（講談社、二〇二〇年）のなかで、膨大な資料と取材をもとに「いま、少なからず確認できたことは、裁判官もまた弱さを抱え持つひとりの人間であり、組織として見た裁判所は、思いのほか権威に弱い。そして、人事権と予算査定権を立法府と行政府に握られている最高裁は、モンテスキューが『法の精神』で示したほどに、三権分立の理念を実践できていないということだろう」と指摘しています。

イタリア学会は、日本学術会議会員任命拒否に対する声明文のなかで、六人を任命しなかった理由についての「説明がない」ことがもつとも問題だ、と指摘しています。「説明と情報公開が民主主義を支える命であり、それを破壊する手段は『説明しないこと』『情報を秘匿すること』であり、「問題の本質は、時の政権が『何が正しく、何が間違っているかを決めている』』ということ。」

「政権与党が言っているから正しい」という説明は、まったくもって説明にはなっていない。そして、その与党を選んでいるのは「国民感情」でしょ、と裁判所が国民に責任をなすりつけています。生活保護基準引き下げそのものの問題にくわえ、その背景にある社会のシステム、民主主義のあり方について、一人ひとりがマクロに捉え、考えていく必要があります。

（編集主任）